

文化・文芸

✉bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

村上春樹さん新作「騎士団長殺し」

を読む

らしさ満載の最新型

小野正嗣さん



どのような書き手にも偏愛する主題、舞台設定、人物造形がある。それらが異なる作品を通じて繰り返され、その「作家らしさ」を形作る。

その意味で、本作はいかにも「村上春樹らしい」と言える。主人公は男性で、妻に去られるが理由はわからない。だが性的な関係には困らない(簡単に別の女性と関係を結ぶ)。何らかの意図を隠し持つ分身的人物と謎めいた美しい少女が現れる。周辺には

に、また別の何かを手に入れることで、世界への信頼が回復され、あたたかな光に包まれた肯定的な展望が開かれる。

この作家らしい主題が満載され、世界中で読まれるハルキ・ムラカミの作品を知りたいと思う新しい読者にとっでは申し分のない作品だ。作中では、人物たちの乗る車の車種や特徴がいていかに描かれるが、本作を読んでいると、随所でスペックが上がったハルキ・ムラカミという車の最新モデルを手に入れているような気になる。ハルキの代名詞とも言える卓抜なメタファーから、句読点の打ち方、全体の構成に至るまで、心をこめてデザインされ、丹念に仕上げられている。乗り心地・読

み心地は最高だ。

でもこれでは自動運転では？ 村上春樹を大いなる喜びとともに忠実に愛読してきたような読者は、ハルキがいればまたメタファーで、読むことに思考や集中力を強いられ、全身で作品世界に没頭できた頃をつい懐かしんでしまう。

とはいえ、本作の主人公の画家がえて「絵を完成させなかった」点に注目したい。環は閉じられていない。村上春樹にはまだまだ書くべきことがたくさんあるのだ。

おの・まさつぐ 1970年生まれ。立教大学文学部教授。2015年、「九年前の祈り」で芥川賞。

「私」が再生する物語

ロバート・キャンベルさん



最後に分かるのは、山荘の周辺に起きた奇妙な出来事から現在まで、すでに十年近くが経っていること。最初に明かされるのは、語っている主人公・肖像画家である「私」がストーリーが回り始める前から別れていた妻とは復縁し、小説の舞台から遠く離れた場所

で過去のことを思い出しているらしい、という点である。

夏目漱石の『こころ』の語り手「私」がしばしば「先生の話が益解らなくな

った」等とふり返るように、春樹の「私」も経験豊かで謎めいた年上の免色渉という相手から言われることを度々「よくわからなかった」、という具合である。春樹の「私」は、生来人前で言うべきことを黙って言わない、どちらかと言えば内気なタイプ。にもかかわらず、千々を越える大作の一部始終をコンパスで製図したごとくきつちりと語りきっている。記憶に揺らぎはなく、目に見えて耳に聞こえる

すべての現実、人によっては見えないけれど実存するディープな非現実も、果てしなくフラットに詳述されている。

単調で穏やかそうに見える山中の日々を、少しでも先に設定された細々とした約束が運んでいる。夜中に鳴る不気味な鈴の音源を免色と一緒を探ろうという「今夜の十二時半」の約束。絵画から飛び出した小っちゃなアイデアII騎士団長が同伴する四日後、火曜日に予定される夕食会。二日後という「私」が設けた、免色の娘と思われる少女の肖像画を描くかどうかの決断期限。その間に、人知の及ばない切実なドラマが降って湧く。短距離に連なる未来たちの間を縫うように、主人公は過去を

省み、「むしろ失ってきたもの、今は手にしていないものによって前に動かされている」意識を深めざるを得ない。

単調(な描写)から読者を掬い上げ、目覚めさせ、緊張の渦に巻きこまれるのは「私」が本来嫌いな暗く閉ざされた狭い空間の風景。小さな棺。祠の奥に潜む石室。離婚届が入った返信用封筒。顔のない男のいる深い「メタファー通路」。真実をめぐるいくつもの通路を抜け、「私」が再生する物語である。

ロバート・キャンベル 1957年生まれ。東京大学大学院教授。専門は近世・近代日本文学。

物語が与える力 信じる

村上春樹さんインタビュー 『騎士団長殺し』の執筆語る

『騎士団長殺し』（全2冊、新潮社）を出した作家の村上春樹さん(68)が、東京都内で朝日新聞などのインタビューに応じた。執筆の経緯や過去の作品、東日本大震災への思いまで、率直な言葉で語った。

「騎士団長殺し」というタイトルが、まず最初にあっただんです。この奇妙な題名の小説について、村上さんはそう切り出した。

騎士団長は、モーツァルトのオペラ「ドン・ジョヴァンニ」の登場人物。「聴くたびに、騎士団長って何だろうって思ってたんです。僕からは離れよう」と。村上さんからは言葉の感触の奇妙さにひかれる。騎士団長殺しという小説があったらどうなる話になるだろう、という好奇心が頭をもたげる。語り手の「私」は無名の画家。

もともと村上作品は「僕」という一人称の語りが定番だった。だが、『海辺のカフカ』で一人称としかかった。物語はどんどん湧いて



新潮社提供

「騎士団長殺し」あらすじ

肖像画を得意とする画家の「私」は妻に離婚を切り出され、雨田具彦という画家の旧宅で暮らし始める。

る。屋根裏から見つけた謎の絵の意味は、破格の額で肖像画を依頼してきた免色という男の意図は——。様々な謎をほらみながら、計約1千ページの物語は進む。

日本という国の傷 僕なりに何かをしたかった

くると、それを制御する文体がなかったから。『ノルウェイの森』をリアリズムで書ききったのが転換点。そのあとの『ねじまき鳥クロニクル』で、リアリズムと非リアリズムのかみ合わせが、初めてうまくいった。

その『ねじまき鳥クロニクル』からは、20年以上。「自分で言うのも何だけれど、20年の差を感じた。昔書けなかったことが書ける手応えがある」

物語は「むろ」という子の誕生とともに結末を迎える。やはり妻がいなくなる物語だった『ねじまき鳥クロニクル』には、なかった展開だ。「僕はこれまで、家族を書いてこなかった。でも今回は、一種の家族という機能がここで始まる」

村上作品は失われたもの、消えてしまったものを描いていると言われてきた。でも今作には、その一歩先に歩みを進めたような印象がある。

「僕自身が年をとってきたからかもしれないけど、何かを引き継いでほしいという気持ちがあるんです。それが何なのか、自分でもよくわからないけれど」

続編を期待する声は多い。「うーん。『ねじまき鳥クロニクル』も『1Q84』も続きはないって言うって書いてあったから、何とも言えないですよ。時間をおかないと、わからない」

今回の小説は、東日本大震災より前の9カ月間を、震災後の未来から回想する設定。村上さんは作品執筆中だった一昨年の秋、福島県で開かれた文学イベントに参加した際に、東北の沿岸を一人、車で走った。「この物語の中の人

いる。日本という国全体が受け、被害は、それとある意味で重なってくる。小説家はそれについて、あまり何もできないけれど、僕なりに何かをしたかった」

人類が負った戦争という深い傷も、重要な意味を持つ。ナチスのオーストリア併合と日本軍による南京大虐殺、西洋と東洋ではほぼ同時期に起こった暴力が、謎の絵を描いた老画家と、次第に結びついていく。「歴史は集合的な記憶だから、過去のものとして忘れたい、作り替えたりすることは間違っていたこと。責任を持って、すべての人が背負っていかねばならないと思う」

昨年デンマークで開かれたハンズ・クリスチャン・アンデルセン文学賞の授賞式で、「どれほど高い壁を築いて侵入者を防ごうとしても、そのような行為は我々自身を損ない、傷つけるだけ」と語った。

「最近世界各地で見られる、異物を排除すれば世の中よくなるという考え方へのおそれが、すごく強い。社会の影の部分は何でも排除しようという流れが強くなっている。ただ僕はそういうことを、政治的なステートメントとしてはあまり言いたくない。物語という形で語っていきたいんです」

「長編小説はツイッターとかフェイスブックみたいな、いわゆるSNSとは対極にある。短い発信ばかりが消費されていくのが今の時代。読み始めたらやめられないものを書くのが、僕には大事なことです」。村上さんはそう語った。

「物語は即効力を持たないけれど、時間を味方にして必ず人に力を与える、僕は信じている。そして、できればよい力を与えられたいという希望しています」

(柏崎敏)